

迷走迷宮ベイルート —メディアの自由の陰と光—

伊 藤 英 一*

- 1、ベイルート港の爆発事故とマクロン大統領
- 2、「大レバノン国」建国100年とマクロン大統領のベイルート再訪
- 3、マクロン大統領の不思議な記者会見と「冒瀆^{blasphème}の自由」
- 4、「冒瀆^{blasphème}の自由」とマクロン大統領の詭弁^{vivre ensemble}
- 5、レバノン杉の風が吹き渡る地に共存共栄を

「最悪の年」^{うた}とも謳われた2020年は去り、新年、2021年の夜明けである。

2020年最後の版となる号（12月14日号）の表紙に、タイム誌は、大きく赤の×^{罰点}を2020に付け、THE WORST YEAR EVER と記した。

フランスの公共放送フランス・テレビジョンの主要チャンネルであるフランス2は、その旗艦番組でもある午後8時からのニュース番組「ジュルナル20時」^{J o u r n a l 20h00}の一年を締め括る終盤に、最悪の2020年の一年間を映像で振り返った。⁽¹⁾

2020年12月31日午後8時36分頃から放映されたその冒頭には、レバノン杉^{cèdre}の国の首都ベイルートで起きた爆発事故が取上げられ、続いて数々の悲惨な事件や災害が回帰されたが、終盤は自然の復権の兆候として、人影の消えたパリの歩道を堂々と微笑ましくもよちよち歩きするカモのカップル、澄んだ水や空気を映し出した。

1、ベイルート港の爆発事故とマクロン大統領

ここでフランス2のニュースの最後に取上げられたベイルート港の爆発事故を振り返ってみよう。

2020年8月4日夕刻にベイルート港で起きた500トン？（当初公表2,750トン、残り2,250トンは行方不明⁽²⁾）の硝酸アンモニウムによる爆発事故では、204名が死亡、9名の行方不明、約6,500人以上が負傷し、最大で30万人が家を破壊されて住む場所を失った⁽³⁾。更には、4万人もの子どもたちが学校へ通えないままという⁽⁴⁾。政治・経済状況の混迷、新型コロナウイルスの蔓延に苦しむレバノンの人々に重ねて襲いかかった痛ましい事故だった。⁽⁵⁾

翌日にはフランス・マルセイユから救急消防隊が派遣され、メディアもル・モンド紙が掲げた社説「傷めるレバノンを救え」⁽⁶⁾のように、レバノンとフランスの連帯と協調への輿論が喚起された。

翌々日の8月6日には、フランスのマクロン大統領が事故現場に立ち、甚大な被害を被った街中で、直訴を試みる雑踏に揉みくちにされながらも人々に寄り添う強い姿勢を示した。人道的・友愛的支援を確約し、「怒りは判る」となだめながらも、政治的腐敗の根絶を訴える市民の声に対し

*いとう えいいち 元日本大学法学部新聞学科 教授

ては内政干渉にならない範囲での苦慮が滲み出た対応が続いた。このマクロン大統領のベイルート訪問は、地元の人々に称賛され、期待も大きかったが、フランス国内では皮肉な見方をするものもあった。もっとも、足を引っ張るような意見を声高に述べるメディアがはびこっているのは、古今東西を問わない事象ではある。

また、この時のマクロン大統領の冒険aventure（に近い）行動には、危惧と懸念を示すフランスのメディアもあったが、それらを振り切って現場に飛び込んでいった勇気は脱帽Chapeau basものであった。

2、「大レバノン国」建国100年とマクロン大統領のベイルート再訪

この爆発事故直後の訪問から、一ヶ月に満たない9月1日、マクロン大統領は再度ベイルートを訪れた。爆発事故の復旧作業、事故の検証や行政責任の追及、政治的腐敗の改革、等々が遅々として進まない中での再訪となった。

ちなみに、この訪問日は「大レバノン国（Grand Liban）」の建国100年を記念する日でもあった。1世紀前に遡さかのぼる1920年9月1日、当時のフランス最高司令官兼高等弁務官であったアンリ・グローGouraud将軍が大レバノン国をフランス統治下で建国することを正式に布告したのである。サンレモ会議でフランスの統治領域に入ることが合意されたシリア等の領域内での設立で、国際連盟の委任統治下に入ることが正式に決定される前の段階だった。

マロン派のキリスト教徒の要望を受け入れて、山岳地帯のレバノンに、ベイルートからトリポリ、シドンに至る沿岸地帯を加えた大レバノンが誕生した日である。ただ、スンニ派やシーア派のイスラム教徒にとっては、また汎アラブ主義を主張するシリアをはじめとする人々には不満と懸念を残すきっかけにもなったことは否めないだろう。

この大レバノン国建国が100年前に宣言されたレジダンス・デ・パンは、今日の駐レバノンのフランス大使公邸であり、マクロン大統領による2020年9月1日夕刻の記者会見も、まさしく、ここで開催された。

3、マクロン大統領の不思議な記者会見と「冒瀆blasphèmeの自由」

記者会見は、マクロン大統領の26分にわたるスピーチと47分間にのぼった質疑応答の計1時間13分をかけて行われた。その日の現地視察や会談に関する内容で、レバノン港爆発事故とレバノンの今後の改革についての受け答えであった。⁽⁸⁾例外は、場違いにも思われる4分足らずの一つの質疑応答だけだった。が、ニュースとして世界を駆け巡り、注目を浴びたのは、この例外部分であった。

質問者はフランス・アンフォ（フランス・テレビジョン）のジュリ・マリ＝ルコント記者で、Julie Marie Leconte「大統領はスピーチで、レバノンと一緒に生きて行く処世術art de vivre⁽⁹⁾だと再三言及されたが、2015年1月のシャルリ・エブド襲撃事件の裁判が明日パリで始まるのを機会にシャルリ・エブド編集部は予言者風刺画を再掲するそうだが、どう思うか？」との質問が出された。質問自体、レバノンの処世術と予言者風刺画の関連が、皮肉なのか、ただ無理矢理に繋げてみただけなのか良く判らないものであった。が、マクロン大統領はこの質問に真正面から応え、「フランスの大統領はジャーナリストや編集者の選択するところに介入しない。フランスは自由の国であり、この金曜日（9月7日）に150周年を迎える第三共和政の初頭から信教の自由と共に、冒瀆blasphèmeの自由を含む数々の自由を認めて来た」と断言した。もっとも、これらの自由には「裏面reversがあり、共通の節度décence、礼儀commune、尊civilité敬respect」が必要

だとの留保は付けられた。

しかし、ニュースとして世界に流されたのは、マクロンが冒涇の自由を全面的に認めたとの部分だけだった。1時間13分の記者会見の中には、レバノンの国民的歌手とされるフェイルーズが^{F a i r o u z}夢見るレバノンの話など報道される価値のある話題に満ちていたのに残念ではある。

また、冒涇の自由についても、センセーショナルな話題としてではなく、もっと地道なテーマとして…と考えてみても、なぜ中東のペイルートで、様々な宗教を信奉する地元記者の多い記者会見の場が敢えて選ばれたのか、摩訶不思議な部分は払拭できない、疑問も湧いて来る質疑応答ではあった。

複雑な宗教、利害関係の錯綜するモザイク社会と国際関係の「仲介者としての役割を果たすため」とマクロン大統領が自己規定したレバノン訪問だった筈である。しかし、この質疑応答は、フランスの三色旗と EU の連合旗を錦の御旗として掲げながら、地元や周辺のイスラム諸国に対して、喧嘩を売るようなものであった。アラブ諸国やトルコの立場への配慮ないしは思いやりが全く感じられなかった。

もっとも、大レバノン国を建国したアンリ・グロー將軍の「個人主義を滅却して国家目的のために邁進を」との大レバノン国民へのメッセージを再三引用したところから勘ぐれば、フランス流のライシテ（政教分離原則）をレバノンにも導入させたいとの思惑もあり得なくもない。個人主義を滅却してというのは、個々人の利益や主張もさることながら、個々人の宗教宗派、家族、組織、共同体の枠を越えて御国のために邁進せよという、まさにグロー將軍の軍隊的規律に沿っての統治に都合の良い考え方である。

そう考えると、第三共和政の植民地主義への反省が全く感じられないのも納得は行く。

しかし、ライシテ（政教分離原則）の真逆のようなコンフェッショナリズム、即ち政治権力を多様な宗教宗派の各共同体に配分するコンフェッショナリズムの素地を形成することに少なからず関わったのもフランスである。また、このコンフェッショナリズムが当初の共存共栄の精神を失って、既得権益化するに伴い、腐敗して現在に至ってしまったのだ。レバノン混迷の一翼を担ったフランスの歴史的責任はないかのような、植民地／信託統治時代の残滓と優越感を背景にした、いらざるお節介のようにも思われた。

4、「冒涇の自由」とマクロン大統領の詭弁

マクロン大統領は従来からも、冒涇の自由について単刀直入に意見を述べて来た。従って、ペイルート再訪の折りの記者会見では、「この質問内容については既に応えて来た筈で時間も無い」と断っても良かった筈である。実際、少なからぬ現地関連の質問は、拒否されたのだ。一方で、冒涇の自由については、このところ機会を捉えては、時としてフランス革命以来、あるいは第3共和政以来、不変の原則であるかのように述べて来た。シャルリ・エブド誌のように、国家に一抹ながらも補助を受け、国家に警備もしてもらいながらのメディアであるにも拘わらず、これを擁護するかにように、冒涇の自由を繰り返し主張している。

しかし、冒涇の自由がフランスの歴史を光栄あるものにしてしまうとしたら、それは支配階級としてのカトリック、時には国王すらも牛耳ってきた宗教との権力闘争にその歴史的意義が認められるからであろう。

冒読の自由は、あくまでも、弱い者が強い者と対峙し、改革を求める時に認められる原則である。

逆に、今日のように、弱い立場に置かれた少数派の宗教宗派や人々に対する苛めや誹謗中傷の手段として、また商売上の打算に基づく商品としての雑誌を売ることが主目的とした狡猾なメディアを、国家がバックアップするような今日のフランスの状況には胡散臭いものが感じられる。

報道の自由は、国家権力を頼りに保証されるものではなく、個々人のペンの力と責任で担保されなければならないのだ。

今から十数年前の2006年、シャルリ・エブド誌やレクスプレス誌、フランス・ソワール紙、ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール誌が、風刺画を最初に掲載したデンマークのユランズ・ポステン紙を支持し、転載することを表明したことがある。その際、当時のジャック・シラク大統領は、「表現の自由は他人の信条への責任を伴う」と再三にわたって明言している。

表現の自由には、他の人の信条、特に宗教的信条への責任が伴うこと、寛容の重要性とすべての宗教への尊敬が必要だとシラク大統領は断言したのだ。⁽¹¹⁾

当時、風刺画を転載したシャルリ・エブド誌は16万部が瞬時に売り切れ、2回の増刷を重ねて、計40万部が売れたという。ただ、商売としての出版事業には成功したのかも知れないが、イスラムの人々をいたずらに傷つけるだけで建設的な効果は皆無であり、一部の過激な行動を煽動した結果責任は負わないまま、報復の危険からは国に守ってもらいたいという虫がいい考えには批判もあったのだ。

シラク大統領は、軽薄な風刺画への大衆の人気に媚びること無く、風刺画を挑発行為として批判をし、その挑発行為がもたらす影響と結果への責任を求めている。⁽¹²⁾⁽¹³⁾

余談だが、このシラク大統領は、スンナ派のイスラム教徒でレバノンの首相を2期目で辞任した後に暗殺された⁽¹⁴⁾ R a f i c A l - H a r i r i の緊密な相棒で、^{t a n d e m} H a r i r i - C h i r a c タンデム・ハリリー＝シラクと二人乗り自転車に例えられていたことは記憶されて良い。シラク大統領は2003年のイラク戦争に強く反対し米英と対峙、大相撲が大好きで寺尾（現・^{しころやま}鍛山親方）の隠れファンでもあった。⁽¹⁵⁾

今のマクロン大統領は、冒読の自由には裏面があるとしてはいるものの、如何にも無制約／無制限であるかのような言い回しで、さもメディアの自由の守り手であるかのような強硬な姿勢を示しており、大衆迎合的な浅薄さが否めない。

隣国のスイスに対しては冒読に歯止めをかける連邦刑法261条の規定に疑問を示し、トルコ・^{E r d o g a n}エルドアン大統領からのコメントに EU のバックアップがあるかのごとく反論、カナダには首相のコメントに修正を要求、等々、頑なに対外的強硬姿勢を崩さないところに、国内向けポピュリストとしての強面マクロンの底の浅さが透けて見える。⁽¹⁶⁾

冒読の自由を擁護するかのときフランスであるが、RSF（国境なき記者団）の発表した「報道の自由度に関する世界ランキング」によれば、フランスは34位と決して誉められた順位ではない。スイスの8位や他の EU 諸国より自由度で遙かに劣っているのは明らかである。例えば、フィンランドは2位に、デンマークは3位と続き、ドイツは11位にランクされている。⁽¹⁷⁾

弱い者を冒読するようないじめを続けて、いたずらに過激派を助長したり、イスラム社会の反感を買ったり、冒読ばかりを勧奨して、言論の自由や報道の自由に関する総合点から見ると劣位にあるというのは、むしろ恥ずべきことではないだろうか。

もっとも、コロナウイルス（Covid-19）、^{B l a c k L i v e s M a t t e r}ブラック・ライブズ・マター（BLM）、等のニュース

が席卷する中、メディアがベイルート復興への興味を示さないにも拘わらず、2020年12月22日に3度目となるベイルート訪問の約束を、自身がコロナウイルスに感染し、約束を果たせないこと⁽¹⁸⁾に葛藤したマクロン大統領の地道で誠実な面はレバノンの人々に光明をもたらした。

「フランス人にとって、レバノン人は外国人ではない⁽¹⁹⁾」との面が行動で示されていたことは救いであった。

世界のメディアも、爆発事故は大々的に報じながら、その後の復旧作業や改革にはニュース性を認めず、マクロン大統領のレバノン再訪時のように、冒涇の自由のみがセンセーショナルに取上げられるという状況は情けない。

時には、火に油を注がない知性も貴重に思われる。

5、レバノン杉の風が吹き渡る地に共存共栄を vivre ensemble

5,000年の歴史を刻むレバノンの地は、紀元前3,000年頃から活躍し紀元前1,200年頃にはイベリア半島まで地中海を制覇したフェニキア人の育ったところで、その航海や交易を支えたレバノン杉の故郷でもある。しかし、その栄光の地も、紀元前875年にアッシリア帝国の、紀元前332年にはマケドニアのアレキサンダー大王の攻撃を受け、以後もローマ、ビザンツ、オスマンといった帝国の支配下に置かれ、政治的・文化的にも、また宗教および民族構成といった面でも複雑なままのモザイク社会が連綿と続いてきた。小国であっても、スイス連邦や昔日のヴェネツィア共和国のような複雑さと小国のメリットを生かした時代が永続していないのが悲しい。

ベイルート港爆発事故の後、数ヶ月を過ぎて、死に体に近いともされるレバノン⁽²⁰⁾。閣僚による職務怠慢の責任を追求するにも、憲法70条の規定では議会の三分の二以上の絶対過半数が必要との特権の壁が高く、八方塞がり、改革の道は険しそうだ。

また、レバノンの内閣改造も、シーア派イスラム主義のヒズボラをメンバーに加えることを米国が反対し、このヒズボラがマクロン大統領の後見を拒否していること等から頓挫状態が続いている⁽²¹⁾。レバノンはテヘランとワシントンの緊張関係の狭間で苦闘しているのだ。また、その米国の大統領のように、任期切れ間際にも拘わらず制度の間隙を悪用することを恥じない国が、他の国の政治に介入することを許す世界的な風潮も、これまた、悲しい。

しかし、爆発事故の終末的光景を、その翌日の2020年8月5日付けのL' Orient - Le J o u r 紙第1面トップのように、ベイルートの黙示録⁽²²⁾と受け取っても、呪いとして、ただ忍従し受け身で留まっても栄光への道は拓かれない。

中東のスイスと讃えられた国が、このまま、単なる「ごろつき 国家」に転落する危機に瀕しているのを見るのは余りにも悲しい。

それでもなお、小さくとも美しく、銀行の安全性が高かったところから「中東のスイス」^{Suisse du Moyen-Orient}となぞらえられたレバノンの国、その町並みの華麗さと文化的な雰囲気から「中東のパリ」^{Paris du Moyen-Orient}と呼ばれたベイルートの街、神々しくも麗しく気高い杉の木々に守られた山々、レバノンが蘇る可能性は残されている筈である。

そのためには、それぞれの宗教宗派と複雑な民族が共存共栄し、互いが誹謗中傷したり侮辱したりせず、平和裡に暮らす覚悟と、その共存共栄に個々人やメディアが責任を担う勇気を持つことが肝心なのだ。

マクロン大統領がレバノン再訪時の記者会見で述べたように「レバノンは一緒に生きて行く^{art de vivre} 処世術」であるとすれば、それがただの馴れ合いや惰性に終始する意味ではなく、積極的な意味で平和裡に共存共栄のために人々が協力する生活芸術^{vivre ensemble}という本来の意味にまで高めることが出来れば、必ず栄光の日々が訪れる筈である。

共存共栄と平和が、太陽の昇る（Levant）地の素晴らしさを生かし、レバノン杉の山並みからの風が吹き渡る心地良い国に再生することを祈りたい。

最後に、日本にとっても多くの教訓と未来の可能性を秘めたレバノンをはじめとした中東の地に、より多くの人々が関心を寄せ、その復興に貢献してくれることを期待している。

特に、懲りないフランスが旧植民地諸国、旧信託統治領、海外県等と比較的良好な関係を保ち続けている秘策を学び、日本の今後の国際戦略策定、なかでも近隣諸国との関係改善^{vivre ensemble}と共存共栄、に寄与して行くことを願いたい。

なお、脚注に付したウェブ等の参照日時は、特に記載の無い限り、2021年1月1日 23:00JST 現在のものである。

(1) Nouvel An : rétrospective en images de l'année 2020

Le 20 Heures boucle l'année 2020 avec une rétrospective des images les plus marquantes de l'année.
JT de 20h du jeudi 31 décembre 2020

(2) 当初、公表された硝酸アンモニウムの蓄積量（＝爆発量）は2,750トンであったが、2020年12月29日、^{H a s s a n D i a b}ハッサン・ディアブ元首相が明らかにしたところによれば、米国 FBI の調査報告書は、「爆発した硝酸アンモニウムは500トン」であると報告、残り「2,250トンがどこに消えたのか」は疑問のままである。

当初、レバノンは国際査察を拒否していたが、後にフランスおよび米国の暫定的調査協力を受け入れている。

<https://www.lefigaro.fr/international/pour-le-fbi-l-explosion-a-beyrouth-a-ete-provoquee-par-500-tonnes-de-nitrate-d-ammonium-20201229>

(3) <https://www.lorientlejour.com/article/1238254/deces-dune-nouvelle-victime-plus-de-deux-mois-apres-lexplosion.html>

(4) https://www.lemonde.fr/international/article/2020/09/02/a-beyrouth-macron-obtient-des-partis-libanais-un-calendrier-de-reformes_6050641_3210.html

(5) Charif Majdalani ; Beyrouth 2020- Journal d'un effondrement, Actes Sud & L'Orient des Livres, 160 pp.

(6) Double explosion de Beyrouth : aider le Liban meurtri, ÉDITORIAL, Le Monde du 05 août 2020.

(7) <https://www.dailymotion.com/video/x7vfdro>

https://www.bfmtv.com/politique/emmanuel-macron-acclame-par-le-peuple-libanais-je-comprends-votre-colere_VN-202008060132.html

(8) <https://www.elysee.fr/emmanuel-macron/2020/09/01/visite-du-president-emmanuel-macron-au-liban-moins-dun-mois-apres-lexplosion-au-port-de-beyrouth>

(9) « Le Liban, c'est un art de vivre ensemble. » と記者は述べたが、マクロン大統領のスピーチでは、

Notre hymne va si bien au peuple libanais, notre devise lui convient, et aussi parce que tous les principes qui prévalent de tolérance, d'art de vivre sont ceux que nous portons, et c'est ceux que j'ai retrouvés hier soir dans les yeux de FAIROUZ, (以下省略) »であった。

- (10) cf. 梅若マドレーヌ；レバノンから来た能楽師の妻、2019年、岩波書店、208pp.
- (11) <https://www.rtl.fr/actu/politique/liberte-d-expression-pourquoi-une-phrase-de-chirac-en-2006-ressurgit-7800915295>
- (12) https://www.lefigaro.fr/international/2006/02/08/01003-20060208ARTFIG90280-charlie_hebdo_provoque_chirac_denonce.php
- (13) https://www.lemonde.fr/europe/article/2006/02/09/m-chirac-condamne-toute-provocation-charlie-hebdo-reimprime_739537_3214.html
- (14) cf. 堀口松城；レバノンの歴史 フェニキア人の時代からハリーリ暗殺まで、明石書店、2005年、310pp.
- cf. 安武塔馬；レバノン 混迷のモザイク国家、長崎出版、2011年、pp.23-33.
- (15) https://www.lemonde.fr/international/article/2020/08/31/henry-laurens-pour-les-francais-les-libanais-ne-sont-pas-des-etrangers_6050482_3210.html
- (16) スイス連邦刑法261条は、穏やかに共生（一緒に生活する / vivre ensemble）することを守ると同時に、（他の人々の）宗教的信条を尊重することを規定しており、少数派の宗教宗派を保護している。

“ Art. 261 Atteinte à la liberté de croyance et des cultes

Celui qui, publiquement et de façon vile, aura offensé ou bafoué les convictions d'autrui en matière de croyance, en particulier de croyance en Dieu, ou aura profané les objets de la vénération religieuse, celui qui aura méchamment empêché de célébrer ou troublé ou publiquement bafoué un acte cultuel garanti par la Constitution,

celui qui, méchamment, aura profané un lieu ou un objet destiné à un culte ou à un acte cultuel garantis par la Constitution,“

sera puni d'une peine pécuniaire.“

<https://www.rts.ch/info/suisse/11716726-la-suisse-nabolira-pas-le-delit-de-blaspheme.html>

L'article 261 bis du Code Pénal Suisse

<http://oldsite2019.cicad.ch/fr/anti-semitism-history/larticle-261-bis-du-code-p%C3%A9nal-suisse.html#:~:text=%2D%20celui%20qui%20aura%20refus%C3%A9%20%C3%A0,emprisonnement%20ou%20de%20l'amende.>

- (17) https://rsf.org/en/ranking_table

- (18) 代理に参謀総長フランソワ・ルコワントゥル將軍を派遣した。

<https://www.lorientlejour.com/article/1245833/le-chef-detat-major-des-armees-francaises-est-arrive-a-beyrouth.html>

フランス軍はバイルート港爆発事故の後、レバノンにおける「友愛」作戦（l'opération«Amitié»）を展開、現地の高い評価を得ている。

<https://www.lorientlejour.com/article/1246046/le-general-lecointre-a-yarze-manifestation-dun-soutien-francais-a-larmee.html>

- (19) “Henry Laurens : « Pour les Français, les Libanais ne sont pas des étrangers »”, Propos recueillis par Christophe Ayad.
https://www.lemonde.fr/international/article/2020/08/31/henry-laurens-pour-les-francais-les-libanais-ne-sont-pas-des-etrangers_6050482_3210.html
- (20) https://www.lemonde.fr/international/article/2020/11/30/quatre-mois-apres-l-explosion-de-beyrouth-un-pays-au-point-mort_6061641_3210.html
- (21) https://www.lemonde.fr/international/article/2020/09/30/liban-le-hezbollah-demande-a-macron-de-ne-pas-transformer-l-initiative-francaise-en-tutelle_6054213_3210.html
- (22) L’Orient-Le Jour du 5 août 2020.
- (23) https://www.lemonde.fr/m-le-mag/article/2020/09/04/c-est-une-malediction-mon-pauvre-pays-mon-amour-le-recit-graphique-de-lamia-ziade-sur-l-explosion-de-beyrouth_6050975_4500055.html